

巻頭言

行く川の水の流れは絶えず

中西書彦

13号をお届けします。本誌は故人来院貞子氏の提案でガリ版刷りの冊子から始まり、6号の出版後貞子さんがお亡くなりになりました。丁度7号の原稿依頼を貞子さんから頂いて一ヶ月後のことでした。葬儀後しばらくして、原稿をどうしましょうかと重朝氏にお伺いしたら続けましょう「貞子の供養になるし、自分の元氣付けにもなる」とのことでした。そこで、桐野三郎会長の指導のもとあつと言つ間に昨年の12号までその年々の会員の想いを綴ってきました。7号では貞子さん葬儀での沢山の弔辞、略歴、発表文などを収録することが出来ました。8号では長女久子さんの貞子さんへの思いを収録、9号で貞子さん3回忌法要と「鶴瓶に乾杯」の縁で、改めて鶴瓶師匠の前座付き「錦木検校」の供養の様子などが収録されています。10号では7回に亘る入来新能のパンフレットと貞子さんの遺稿として単行本に纏められた「貞子の語る入来文書」と「茅門のある町から―貞子の徒然草」の表紙をカラーで紹介できました。11号と12号では貞子さんの町興し運動で新能を鹿児島で他所に先駆けて7回も行われた偉業を改めて振り返ってみました。また、平成28年8月の台風で倒壊した「茅門」の復元した姿も紹介できました。

さて、今年2月に桐野会長が身罷られました。また、早いもので4月末には貞子さんの7回忌法要が三男の大田導師のもと、お子さんやお孫さん達、炉ばたセイ談会員、入来新能実行委員会の皆さんなどが集まり、賑やかに行われました。その席に故桐野会長の姿が見えないのは寂しい限りでした。今年6月関係者で炉ばた庵に集まり、次期会長の人選について協議しました。その結果蒔谷繁樹氏にお願いして快諾して頂きました。同氏は本誌発足時から会員であり、本誌の発行だけでなく、重朝氏の健康や竹林などの管理などにもこの7年間協力して来られました。新会長のもと会誌の流れを尊重しながらも、時の流れも受けてより良い会誌になることを期待しております。